

淨土

1985-11

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運轉者 (特別振込認許誌) 第三二五号
昭和六十年十月二十五日印刷 昭和六十年十一月一日発行
第五十一卷 十一月号



25秋 淨土

小林



昭和61年度版

浄土宝暦

—三上人遠忌慶讃記念号—

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和61年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであ
らかじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

.....お申込み.....

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替)東京 8-82187

十一月号

赤鉛筆



但まさに憶想して、心眼をして見せしむべし。

——『観無量寿経』真身観文

目次

——法話——

- 入院説話より臨床布教へ……………旭 俊 正……(2)
- お十夜に想う……………藤 原 円 忠……(6)
- お十夜散歩(二)……………坂 野 泰 巨……(11)

＜連載＞ 一紙小消息 ④

末法の凡夫も往生できる……………村 瀬 秀 雄……(16)

み仏とともに = 8 =

——大本山に入寺——……………安 居 香 山 ……(22)

＜ナムナム童話＞ (4)

ナムナムさんの石……………ぬのむらてつや……(27)

＜寄稿＞ 青年は、もっと世界に目を向けよう…笹 原 堅……(32)

◆◆長篇連載小説◆◆

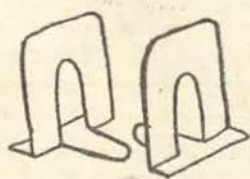
立ち止まるな菩薩 第17回……………寺 内 大 吉……(35)

英才の秘密……………挿絵 松澤 達文

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

入院説話より臨床布教へ



旭 あさひ

俊正 しゅんしょう

(江津市西院寺住職)

入院が縁で有難い体験を得たことを喜んでいますが、私の個室にて三谷さんの話に、子供の頃、父が信仰家で家庭の朝の動行に必ず仏壇前に坐らされて、解らぬままに日常動行をあげたが、一枚起請文に「源空御判」とあるが、源空とはどういうことですか、の問いに一瞬啞然としましたものの、次に「ナム」とはどういう意味か、真宗では「ナモ」と言われますが、と今度は知る人は仏教の要義ともいえる質問です。私も南無という広大な名題についての咄嗟の応えに「何卒」と言って合掌して見せたことでしたが、次の様なことを申し上げた次第です。

始めに言葉の意味を申しますと、語原は印度で「ナモ」とも言い、中国語に訳して「帰命」ということで、帰教、帰礼ということにも当り、救我即ち「我を助け給え」の一念の表れであり、私共衆生が、信仰の対象である仏に向って専心に帰依、敬順する語であります。私共浄土教徒の信仰の本尊、本願の主体、また私共の生命の大親様である阿弥陀仏に帰依することが、言葉に表れて「ナムアミダブツ」です、と申し上げました処、こんなに

丁寧に教えてもらったことは始めてです、と欣ばれましたが、私は重ねて語の意味より南無する心と実践が大切であることを話しました。

お釈迦様が勤苦六年の暁、覚られた、その第一声が「南無仏」であったと聞かされております。その内容は縁起とか、いろいろ云われておりますが、難しくなるので措きましよう。また別の観点から言いますと、私共人間世界で諸悪の根源である我執の心を離れて、真実に生きるためには、先づ如来に南無する心から出発すべきで、その実践が念仏です。亦、今在る自分が天地万物、あらゆる諸縁のお蔭で生かされている有難さが感じられて来ますと、「南無」せざるを得ないことが理解されてくると思います。等と話しますうちに、少しは呑みこんでもらったようでした。ところで、この人は余程解放的な話し好きの人でして、それから各病室を廻って私の話を取次ぎ語っておられた様子で、特に婦人室からは夏の開放された雰囲気の中から「御法礼」などと云った笑い声も聞こえて来ていました。

それから翌日、前記の又話を聞いた一人の老婦人が私の部屋に来られました。この人の入院は一番以前かららしく、お齡を聞けば九十五歳で頭髮こそ白いが、背筋通ったなかなかのしっかり者と見うけられました。お話によれば元赤十字の従軍看護婦で、中国にて終戦となり帰国して郷里に帰ったが婚期を逸し独身の尽で養女をもらって家庭生活に入ったが、旨く行かず今は養老施設の世話になっている。今施設から送られて此処に来て、自分が、自分などの高齢でもう先の知れたものが、ほんとうは手術の成否はどうでもいいんだが等と、少々投げやり風に話されるので、私は戦時中のことを勞らった上で、縁あってこうして入院治療出来ることをよるこび、仮令一日たりとも、生きてるうちは、今日の日暮しを喜び感謝して生きることが大切でしょうネ、と申し上げ、「夕立や海女も養着る磯辺哉」等の句を例に話してみました。しかし、どうも余り反応が無さそうなので、お宅の宗旨はと聞くと真宗ですと云われる。併しお寺に常参して聞法されたことは無いらしく、それに高齢ではあり、いつも従軍看護婦に対する補償が充分でないことが不満の様に推察されました。

概して自我意識の強い人はなかなか信仰に入り難いもので、この人の様に戦争体験から戦後の激動の思想社会にもまれ、高齢をむかえて法縁の機なく徒らに毎日を過している、こうした人達も多いことと思われまふ。

今の時代は物は豊富で福祉が行届き、老人も恵まれた世の中に見えますが、しかし物質や施設は足りても心の充実、信仰の芽が開かない限り、本当の幸福はあり得ないことです。

前記の方にも、結局「私は浄土宗の教師です。生死の問題はただ日々お念仏を称えているうちに如来様よりわからせていただけます」と言ってお別れしましたが、ともあれ、僅かの入限期間でしたが、色々と得難い体験をさせていただき、明るい気持ちで業務の山積する自坊へ帰りました次第でした。

実は、私のこの入院前の六月二十日に市の仏教会主催で「ホスピス治療と仏教」というテーマで会合を持ち、市内の済生会病院の外科部長阿部重郎医師（青森県人）を招いて懇談協議しましたが、その時の話に関連して、私の本文の話の重点、現代の臨終行儀に就いて言及させていただきます。

前記の病院は病床三百ベッドに附属特別養護老人ホームにも百人の収容者の居る施設ですが、お招きした先生の話にこの病院に来て手術した癌患者八百人の中、只十名程の患者だけに癌病を明したが、その結果など臨終終末の問題で色々話し合いました。医師の話に代表的な例が、或る宗の高僧（念仏者に非ず）が癌で後三年は生きられるものを癌と聞いて一ヶ月で死なれたという話。また癌とわかると死にたくないものが自殺をはかる、特に四十代以下は自分は死ぬ筈はないと思っている、等の話があり仏教会側からも色々臨終対面の話等を提供し、この会合で病院側でも仏教会に便宜を計るために病院内の一室を設定し、重病患者にも仏教教師の立合の機会を考えようということでは一歩前進したわけでした。

今の日本では八〇％に近い人が病院で死を迎えるというのですが、畳の上で家族にみとられつつ死にたいという民族的願望を考慮されず、宗教的儀礼無しで人間最後の命の問題が取り扱われることは吾々宗教者としては、職務感よりして何か抵触する心残りを感ずることです。

この問題は今の日本の仏教教団の取組むべき重要な課題と思われます。聞く処によりますれば病院側も只今までの遮二無二の延命処置より介護を見直さねばならぬ時機に来ているということですが。

こうした折、寺内大吉師は医師会に招かれて講じ、今よりは寺より病院への時代、ということをおられたと聞きます。

今年は仏教大学でも、死を待つ人々の心の救済やホスピス運動の研究に取り組む「死と仏教」の懇談会が結成され、京都四条センターで連続公開講座も行われております。また地方の一例として、九州にても九大医学部の池見教授を中心に医師、宗教家、哲学者にて「生と死を考える会」が結成され、日本人の正しい死生観を呼びもどす真摯な活動も新聞報道されて居ります。その他全国的な動きも徐々に進行中であるものと思われまします。

こうした時に、浄土宗には古来「臨終行儀」なるものがあり、その回帰と現代化こそ正に現下宗門の取り上げるべき緊要事であればならぬと確信し、この課題の推進を痛感します。

現実はどうでしょう。今の日本の風習は臨終前に仏僧が駆けつけますと「縁起でもない、まだ早い」と断われ、入れてもらえません。その代り死んだら夜中でも枕経に早く叩き起されます。私共はその死顔を見て、臨終の模様を察するばかりですが、それでよいものでしょうか。それなればこそ檀信徒の方に望みますことは、お十夜法要等には欠かさず参って説教を聞き、また家庭にても平常より宗徒必修の日課称名を怠らず、決定往生の信を堅め念仏の功を積んで置くことが肝腎です。

しかし只今の時代は、平生は仏様には用はない、死んだら頼むという人が多い。それでいて臨終の時は死にたくない、と、跪き苦しむという無信仰の人達の為に憐憫の情まことに禁じ得ないものがあります。私共も仏弟子としての自覚の上からも、人間の生きていようから心の救済に力点を注ぐべきで、浄土宗は他宗に卓越する教義と実績のある「臨終行儀」が伝えられたおりますれば、「臨終行儀」の現代化と布教の実施を強く要望し提言いたして置きます。それが通常に実践化された時、仏教復興と云えると思います。

お十夜に想う

毎年秋になって、夜の時間の長さが感じられる頃になると、浄土宗の方々のお寺で、お十夜法要が営まれる。

このお十夜法要は明応四年に、鎌倉の光明寺の八代、祐崇上人が後土御門天皇の勅許を戴いて、浄土宗の大事な行事として営むようになったと聞くから、以来約五百年の歴史をもつ行事である。

戦前のお十夜法要は、夜遅く迄法要を営んだり、或いは夜通し、或いは何日か連続して



ふじ
藤 原 円 忠
えん ちゆう

(市原市無量寺住職)

法要が営まれた。そして、夜食として汁とご飯がふるまわれ、又集まって来る近所の子供達には果物を配ったり、所によっては建前の餅投げのように果物を投げたりした。お十夜は浄土宗の僧侶にとっても大事な行事であったが、檀信徒にとっても、一年の自然の収穫を、或いは自から獲り入れ、或いは食卓に到来させた事に感謝し、残暑も過ぎ夜のしじまの心の落着きに信心の心を思い出し、地域の人々とのコミュニケーションを楽しみ、併せ

て先祖供養も出来る、ということであった。そんな感じで善男善女がお寺へ集まる、子規の俳句に、「月影や外は十夜の人通り」とあるような状態で三々五々がやがやと話し乍ら集まり、「下駄の上を渡り上るや十夜寺」という風にお寺に集まり一夜の善根を積んだ。しかし、戦時中や戦後はふるまうべき食べものが手に入らずに、お十夜法要を営むことを中止したお寺が多い。危険なので夜の行事を昼間としたところも多い。やはりその頃にお十夜法要を止めたお寺が、私の寺の近くにも数ヶ寺あったが、近年になってほとんどが復興された。結構なことだと思う。

私の寺のお十夜は十一月、十月に入るとボツボツとお十夜の準備に入る。亡くなってから初めてお十夜を迎える霊位に対する諷誦文を作り、本堂のお仏器を磨き、檀家さんから申し込みのあったお塔婆を書き、法要の必要品を揃え、多勢のお坊さんで法要が営めるように他のお寺への協力をお願いしたりする。

法要が近づいて来ると、法要目前の十日間は夜ご本堂で礼拝をくり返して法要の当日を待つのである。

私が子供の頃は、お十夜前後はかなりはつきりした季節感を覚えたものである。

先ずお彼岸が過ぎると、稲の脱穀が始まったと記憶している。予め稲を刈って田の中に作った物干竿（稲架^{はさ}）一般にはオダと呼んだ）に掛けてある犯を外して、足で回転させる脱穀機に掛けて稲の穂から稲の粒を外す作業だがその音がガアガアと単調なリズムで大地を覆う。稲の粒を外した稲藁等を燃す煙が大地に這い時には天に昇る。この頃から急に周囲の変化が目につくようになる。海と川でハゼ釣りが始まる。やがて鼠たちが田畑からどんと家の中へ移転して来て、ガリガリと天井で何かをかじる。稲を獲り入れた農家と鼠が攻防戦を展開する。農家が今度は海苔漁業の漁師となって海苔養殖のための網を海の中に張る。張った網は海苔の成長を見ながら張り

かえたり、追加して張ったりする。運動会のスピーカーも珍らしかったし、青空も日増しに澄んで美しい。澄んだ空に熟れた柿があつて、それが夕陽に照らされた時等は何とも言えぬ輝きを放つて天然の不可思議を覚えたものである。

そんな時期が丁度お十夜法要の時機に当り、お寺へ来る客の数も増えるのが楽しかったのを覚えてゐる。

お十夜法要の当日は、ご本堂の入口に白い幕を張り、客間を片付けて待つところへ近隣のお寺のお上人様達が集まつておいでになり、檀家の人達が或る程度揃つたところで法要が始められる。お十夜には諷誦文が読まれることになっていて、諷誦文を書いて折り畳んだ紙を紫色のフクサに包んで他所のお寺のお上人がご本堂へ奉持して行かれるのを見ては、「あの中が見たいなあ」と小さい頃は毎年思つたものだ。諷誦文を読むのに喉が疲れるからと言って、法要の途中で薄い塩水をコッ

プに入れて持つて行かれるお上人もいた。現在では声がかすれたりすると砂糖水か甘いものをなめるが、私が子供だった頃は専ら極く薄い塩水だったようである。

お十夜法要の終つた後は、お寺へ来る人の数もめっきり少なくなつて日一日と冬の到来を肌で感ずるようになる。

落葉が風に舞うと言うより、風を見つけた落葉が風に乗つて飛び上がり或いは走り来たり走り去る、という感じである。一夜を木枯らしが咲き荒れた翌朝は、落葉が地面を掃いて境内の砂がきれいに掃き清められたようであり一つ無い境内になる事もある。落葉は境内の隅の木の根等に吹き寄せられて驚く程の山となつた。次の夜に雨を伴つて風が吹くと此の落葉が今度は砂まみれになつて境内いっぱいにならかつてゐる事もある。落葉は風を得て生きものの如しであつた。落葉焚きは毎日の仕事、その落葉の中にさつまいもを入れて焼き、細竹でつついて焼け具合を

見乍ら焼芋を食べるのも楽しいし、朝学校へ行く前に焚き火にあたるのも楽しかった。

此の頃になると、町の人々の心はいっせいに海へ海へと集中して行く。海苔養殖の実り多き時朝となるので、海と自宅を往復するほかは、ひまな時でも、海の荒れ具合を眺めたり、海の上空の様子を見たりし乍ら世間話しを交すようになる。

いつしか年の暮に近づいて行き、寺の境内を飛び廻っていた落葉樹の落葉もあらかた焚き尽した頃には松の落葉が散り敷かれる。松の落葉は葉と葉がからみ合っていて風に飛ばされる事はないので簡単に集められ、風呂焚きや飯焚きにも便利に使われた。

子供のお十夜前後の思い出はなつかしいが、今日では状況は大きく変化している。稲作りも少なくなり、鼠はほとんどいなくなり、青い空も心驚かす程に澄む事も少なくなつた。工場が出来て海での漁業も無くなつた。変つたのはそれら一つ一つの変化だけで

なく、全般的に季節感が無くなったという事の方が大きい変化だろう。昔はその時期時期に何となく、ホッとする区切りの時期があったように思うが、現在はそのホッとする時期に逢えることが大変むつかしくなつて来ているし、今後は更にむつかしくなるように思われる。

こういう変化は、お十夜に対する認識でも影響していることは無いだろうか。お十夜は、簡単な修業では認めてもらえない（言い換えればご縁を結ばせてもらえない）。仏様と愚か者の私との関係を、「人間が人間として持っている愚かさは咎めないで、ただ一心に私の名を呼んで祈るなら救いのご縁を結んで上げよう」と約束するよ」と慈悲の対応をして下さる阿弥陀仏に感謝の誠を捧げることによって、更に一層のこの世での、又あの世での導きの強からん事を願うことから始まった法要であろうが、実際は、一年の自然の収穫を食卓にのせ、或いは自から収穫し、その収

獲に感謝し、先に亡くなった人の努力に感謝し、先に亡くなった人を阿弥陀仏にお願いをし、先祖と自分達を加護して下さる阿弥陀仏に感謝するという感じで長い歳月を受け継いで営まれて来たのである。自然に對する感謝という心情がその中では大きく働いていたものと思われるが、今日ではそうした大切な心情が、年を経ることに影が薄くなるようだが、残念に思われる。

近年の十夜法要その他法要でも水子供養の塔婆を上げる人が増えている。「此の世で一日一夜善を修めれば仏の国で百年善を修めるよりも功德は大きい」というお経の言葉からすれば、生まれ来る生命を断つた罪を、塔婆を建てて供養する善で相殺して罪を消そうとする気持は昔はあまり見られなかった心情だが尊い心として受け取めるべきだろう。

更に十夜法要では諷誦文回向という事をする。亡き人の冥福のためにこれ程に多い人達が施主となってお願いをしています、という

事を仏様に申し上げる一つの形式だが、一人の人が亡くなった事によって家族親戚から近所の人、友人等が施主となって仏にお願いすることは、平素の疎外した交際を補う働きもある。

人間はだれしも欲に引かれて行動することが多い。欲に引かれて進んで行く先々では、仕事、愛情、名誉等々あらゆるものに限界があり、その限界にどう対処して良いか悩み苦しむ中には行きづまって自からの命を断つ事もある。しかし仏に手を引かれる心で進む心には限界があったとしても自分が無くなる事はない。お十夜では先に亡くなった人のことを仏様をお願いするほかに、自分が仏様と縁を深くしようとする事も大事だろう。

とに角お十夜では、感謝の心、先祖をお願いする心、仏様と自分をご縁を結びたいと思う心、この三つの心を大事にしたいものである。

お十夜散歩(二)



関東の三大十夜といいますが、鎌倉の光明寺、八王子の大善寺、鴻巣の勝願寺でおこなわれるお十夜法要であります。

一口にお十夜といいますが、それぞれに特色があり、光明寺は双盤十夜、大善寺は諷誦文十夜、勝願寺は塔婆十夜(別名さんま十夜)として有名であります。

坂野泰巨

(茅ヶ崎市西運寺住職)

私の寺を引き合いにだして恐縮ですが、昭和四十年代前半までは寺の周辺がにぎわいました。湘南地方では、他の地方同様に秋になるとお寺のおまつりが盛んになり、農家の人々もそれを目安にして農作業をすすめたものであります。

お十夜になると、サーカス、見世物小屋、

芝居小屋などの興行もかかり、露店商、植木市などで、境内をはじめその周辺は広範囲にぎわい、道路は参詣人で埋まり、歩くのがたいへんでした。

そのため私の寺は、寺の名前よりも「南湖のお十夜寺」といった方が知られていました。子どものころ、隣の町へ自転車を使いに行き、たいていのお宮にも棒をもった悪童たちが遊んでいました。他の学区の子どもが通ると、なぜか、つかまえて袋たたきにするようなことが平気でおこなわれていました。

一生懸命に逃げるのですが、たいてい、つかまってしまう。私の乗っていた自転車の後ろの泥よけのところに、白ペンキで「お十夜寺」と書いてありましたが、これが実に利きめがあったのです。

追いかけてきても、その字をみると「なんだ、お十夜のお寺のだ」と言って、逃がしてくれただけで、何度かありました。それほど、

お十夜が子どもたちにもまで浸透していたわけがあります。

藤沢の竜口寺のお会式、遊行寺の開山忌がすむと、そのまま興行師たちは、私の寺へ移動してきて小屋がけを始めます。また、お十夜の数日前になると、露店商は地割りをします。そして、私の寺のお十夜がすむと、次は鎌倉のお十夜へと移動して行つたのです。

これらの興行は、鎌倉の次は八王子へ、次は鴻巣へといった具合に移動して行きます。

私も、関東の三大十夜といわれる鎌倉はもちろん、八王子や鴻巣のお寺へも境内のにぎわいの盛んなころ、おまいりをさせてもらったことがあります。その地で私の寺へきた興行師や露店商など、顔見知りの人たちに出会うと不思議な気がしたものであります。

私の寺のお十夜は、十月の七日・八日・九日の三日十夜（戦前は五日十夜）でしたが、それが二日になり、今日では一日十夜になりました。

した。

かつて、観音堂の講中部屋はこ詠歌講のお籠りの人たちでいっぱいでした。また双盤講の打ち鳴らす鉦の音と大太鼓の響きは、秋の夜にこだましてまことに力にあふれて気持のよいものでした。

諷誦文の回向も数座もうけられ、回向師の口調と呼び出し僧の叩く念仏鉦の音が、実にうまく調和して檀信徒の涙をそそりました。

そうしたお十夜も、時代の変遷とともに見ることができなくなりくした。

農地や空地には住宅がたち、車時代をむかえて交通事情もきびしくなり、昔のお十夜はなつかしい思い出になりつつあります。

また、テレビの普及によって、しだいに人々の興味も薄らいでいったようです。

このように、お十夜という行事も大きく変化してきているわけですが、よく一般の人から、「お十夜さんは、今はどうなっているの

ですか。以前のようになぎやかですか」と、きかれることがあります。

それなどはまだよい方で、「お十夜はもうやらないのですか」の声をきくと、がっかりしてしまいます。

お十夜というのは、寺の外のなぎわいであることとの錯覚をしているのです。それも、お十夜をなつかしがつてのことでもあります。

さいきんは、どのお寺さんでも小じんまりとお十夜をやっているようです。何とかにぎやかにしたいと、いろいろなアイディアを凝らしているようです。

しかし、笛ふけど踊らずのごとく、お十夜がいまひとつ盛りあがりません。

そのため法楽として、落語・漫談・講談・カラオケなどをとり入れたり、また外をにぎわせるためにいろいろ工夫をしているお寺もあります。それも長続きはしませんし、それでは信仰は育たないのです。

法楽を主人公としたお十夜であっては、本

来のお十夜そのものが客人になってしまい、
かえって衰退するばかりであります。

やはり、見せかけのものではなく、本来の
お十夜の意義を正しく檀信徒に伝え、檀信徒
が率先してお十夜に参詣するのではなくてはな
らないと思います。そのためには、平生から
教化がいかに大切かがわかります。

私も「お十夜のあるべき姿」については、
毎年くり返し、くり返し苦労しています。

三木恵照編『小さな妙好人』（永田文昌堂）
のなかに、

「今日、学校へ行く途中、観光バスを待つて
いる人を見てこう思った。今日はお寺の法要
があるのに、観光バスに乗って行かれるから、
お寺にお参りする人が少ない。バスで行くひ
まがあるんやったら、お寺へ参ったらいいと
思った。ぼくはお念仏をいいながら学校へ行
った。」

という、小学四年の男の子の日記がでていま
した。まさに、大人が小さな妙好人さんに叱

られているような文章であります。これが
日本人の信仰の実態なのかもしれません。

檀信徒といえども、いまだにお寺は葬式、
法事をしてくれるところという考えをもった
人たちが潜在しています。これが信仰に結び
つかない原因でもあります。

法然上人のおことばに、

「仕事（余事）をしながらのお念仏ではない。
お念仏をとえながらの仕事である」

というのがありますが、これが正しくうけと
られなくては、信仰は育たないのです。衣食
住の生活が優先では、お念仏の信仰は片手間
なものになってしまいます。

自分の力で生きているのではない、お念仏
のなかに生かされているのだ、ということど
ないとお十夜の真意もつかめないのです。

お十夜は、他の法会と異なり、本来は全檀
信徒が主催する特別な行事であり、住職は招
待される立場であります。

昔は、その辺が寺と檀信徒との間でうまく

かみ合わないこともおこりました。それは信仰がそっちのけで、ただお十夜をやるのが檀信徒の主目的であるがごとく強調されたためであります。それがのちに、あらゆる面で檀信徒あつての寺であるがごとく印象を与えてきたことも事実であります。

信仰なき名ばかりの檀信徒はいくら増えても無用の長物であり、当り前のことながら、信仰あつての寺にしなければならぬというのが大切な反省点であります。

わが国の高齢化は、急ピッチで進んでいます。人生八十年の時代をむかえています。たとえば六十歳の定年から八十歳代の二十年以上をどのようにすごしたらよいのでしょうか。

一休和尚の歌に、

世の中は 食うて稼いで 寝て起きて

さてそのあとは 死ぬるばかりぞ

というのがあります。これからは、人生五十年の頃とちがって、老後を心の支えもなく、

何もしないでのおんがり送れるような生やさしい時代ではありません。

法蔵菩薩は、世自在王の面前で、

「たとい身を、もろもろの苦毒の中に止むとも、わが行は精進にして、忍びて終に悔いざらむ」

との決意を披露されました。そして四十八の大願を起し、永劫のご修行によってその願を成就し、阿弥陀となられたのであります。これは、私たち衆生のために代修してくださったのであります。それがお念仏であります。

この私のために、お念仏をおしめくださった心の親さまのお心を、つねにわが心にとだいて生活しなくてはなりません。

知恩報恩とは、まさに、おかげさま・ありがとうということですね。忘恩は動物の世界と言われています。お十夜には、おかげさま！ ありがとう！ の念仏を称えましょう。

お十夜は、報恩感謝の念仏会であります。

お十夜は、心願発起の念仏会でもあります。

一紙小消息

④

末法の凡夫も往生できる



村瀬 秀雄
むら せ ひで お

「時くだれりとても疑べからず。法滅以後の衆生なをもて往生すべし。況んや近來をや」

釈尊がご入滅になつてから正法の五百年と像法の千年が過ぎて、今や末法の時代なのである。末法の世となると人々の思想が乱れ、煩惱がさかんになり、鬭争を好む等して世が濁り、仏の教えがあつても正しく修行する者がいなくなる。だからといって念仏を唱えれ

ば誰でも極楽往生できることを疑つてはならない。何故なら経法が滅し去つた後の時代になつても、念仏を唱えれば往生できるからである。まして経法が滅し去つていない今時の人々が往生できないわけがない。

末法の時代は一万年続くといわれ、それが過ぎると經典の教えがすべて滅し去るとされている。しかしこのような時代になつても、念仏往生の法門だけは滅びずに後に残り、人

々を救い続けてゆくのである。經典に次のように説いている。

「時代が下って末法万年が過ぎた世の中になり、いよいよすべての經法が減し去っても、釈尊は大慈悲の心で人々を憐れむが故に、ひとり無量壽經だけを百年の間この世に留め置き、念仏の法門を遺すであらう。もしその時代にこの經典にあうことができて、念仏を唱える者があれば、その者は願いの通りに極樂淨土に往生できる」(無量壽經)

經法が減し去った後まで念仏の法門が残るのであるから、その時代の人が一声の念仏しか唱えられなかったにしても往生できるのである。善導大師は次のように説いている。

「末法万年の時代が過ぎて、三宝を説く法門がごとごとく減し去っても、無量壽經だけはなお百年の間は留めおかれ、人々に利益を与えることになる。その頃の人々が念仏の功德の大きいことを聞き知って、一声でも念仏を唱えれば、その人は必ず極樂淨土に往生する

ことができる」(往生礼讃偈)

このように末法万年が過ぎた後の百年の間は念仏の法門を残すと説かれているが、百年というのは一応の年限を示したに過ぎない。釈尊は念仏の法門を百年間ではなく永遠に残し給うたのである。何故なら釈尊は阿難に次のように命じ給うているからである。

「阿難、汝はよくこの語を保って忘れることがあってはならない。この語を保てということとは、即ち阿彌陀仏の御名を保てということである」(觀無量壽經)

阿彌陀仏の御名を保てということは、念仏往生の法門を遠く後の世にまで弘通せよと命じ給うたことなのである。善導大師は次のように説いている。

「釈尊が阿難に阿彌陀仏のみ名を保てと命じたことは、仏のみ名を遙かに遠く後の世にまで流通させることを委嘱し給うたのである。釈尊は極樂淨土に往生できる行として、定善と散善との諸行があることを明かし給うた。

しかし最後に釈尊は阿彌陀仏の本願に適應する行として、一向に専ら念仏を唱える行を勧め、念仏の法門だけを遠い未来にまで残すように命じ給うたのである」(觀經散善義)

定善というのは精神を統一し、雜念を払って極樂淨土を觀想する修行である。散善というのは心が散乱している平常のままで修行する行である。何れにしてもこれらの修行によって往生できるのである。釈尊は定散兩善について詳しく説き終つてから、時代がいかに変つても後世永く伝えて弘通させることを命じ給うたのは定散兩善の諸行ではなくて、ただ念仏の一行だけであつた。このように釈尊が諸行の中から選んで念仏の一行を阿難に委嘱し給うたことを、法然上人は釈尊の選択付屬と呼んでいる。それなら釈尊が何故念仏の行を選んで阿難に委嘱し給うたのであろうか。上人はそれに二つの理由を挙げている。その一つは本願の行であるかないかということである。念仏は本願の行であるから委嘱したの

であつて、定散兩善の諸行は本願にない行であるから委嘱し給わなかつたとしている。他の一つは念仏が勝れた行であることを明かすために、定散兩善の諸行を説いたとしている。つまり諸行は廢のために敢えて説き、念仏は立てるために説いたとする。上人は次のように説いた。

「定散兩善の諸行がいかにか詳しく説かれていても、最後になつて釈尊は阿難に授け給わなかつたのであるから、これらの諸行は結局は廢される法門であるのに拘らず敢えて説かれているのである。これに反して念仏の一行は最も勝れた法門として永遠に立てるために説かれた行である。いい換へれば定散兩善の諸行は念仏を顯彰するために説かれていたのである」(選択集)

末法の世となると戒律を守つて修行する者がいなくなり、惡行を行う者が次第に多くなつてくる。このような時代に難しい修行はあつてもできないが、念仏は誰にても唱えられ

る易しい行である。しかも唱える者が賢人であつても愚人であつても、善人であつてもなくても同じように極楽往生できる。このようにすべての者を洩れなく救うために念仏往生の本願をたて給うたのは阿弥陀仏の慈悲であるが、この本願の行を永遠に弘通させるように阿難に委嘱し給うたのは積尊の慈悲である。浄土宗はこのような念仏を宗旨としているのであるから勝れた宗派である。浄土宗は諸宗より勝れているし、念仏は諸行より勝れていることを、上人は次のように説いた。

「浄土宗が諸宗よりも勝れ、念仏の一行が諸行より勝れているということは、どのような者でもすべて救われるということである。各宗の修行は心を静めて真理を観想したり、悟りを求める心を起したり、經典を誦誦したり、真言陀羅尼を唱えたり、精神を統一して観察したりするのである。何れも勝れた仏法修行であつて疎かにしてはならないのであるが、何れもこの世で迷いの世界から抜け出して悟

りを求めようとすることに变りがない。しかし末法の世となつたために、修行する者の力が及ばないのである。修行者が教えの通りに修行できないのは、その者の能力が足りないからである。今の時代をみると末法万年が過ぎて人寿が十歳に縮つたような時代であり、罪からいへば十惡五逆を犯した罪人にも等しいのである。しかしこのような時代になつても老若男女を問わず、念仏を唱えさえすれば一念十念の念仏しか唱えなかつた者に至るまで、一人も洩れることなく仏の慈光に浴し、仏の本願力に乗じて往生できる。こうしたわけで浄土宗は諸宗より勝れているし、念仏の一行は諸行より勝れているというのである」(禪勝房に示されける御詞。勅修御伝第四十五)

いかに勝れた法門であつても、その教義が深遠であるために理解し難いものであれば、凡夫にとつては教えがないのと同じことである。いかに功德が多い修行であつても、難しくて修められなければ、凡夫にとつて縁のな

い修行である。そればかりでなく世情が学問や修行を許さない場合がある。たとえ才能があっても、環境がさせないからである。法然上人の時代はまさしく動乱の時代であった。例えば寿永四年（一一八五）上人五十三歳の時に、源義経が壇ノ浦に平家を滅ぼし、大地震があつて多くの大寺を倒し、疫病が流行した。その一方では東大寺大仏の開眼供養に後白河法皇が臨御し、源頼朝は米一万石、砂金千両、上絹千疋を寄進している。実はその翌年の文治二年（一一八六）に大原問答が行われたのである。この年の秋に天台座主顯真の要請によつて、法然上人が大原勝林院丈六堂に赴いて浄土宗義を談じたのがそれである。この日は各宗の碩学が集まり、多数の聴問者が加つた。問答は質問に対して応答するという形で進められた。相互に談義を重ねること一日一夜に及んだという。上人は各宗の教義について説明し、修行の段階の様相を詳しく説き、そして最後にいった。

「これら諸宗の法門は何れも深遠な教理をもつていて、修行によつて得られる功德はまことに勝れている。もし人々の能力がこれらの教えによつて修行できるだけ勝れているとすれば、悟りを開く人も多いであらうし、生死の世界を抜け出す者も陸続と現われるであらう。ただし源空のごとくに頑迷にして愚鈍な者は全くその才能を欠いているために、どの法門を学んでも悟り難く、どの修行に励んでも迷いの心を除くことができない。しかしながら源空も仏門に入つて悟りの智慧を求めて聖道門の各宗について学び、迷いの世界から抜け出せる道を探ねてきたが、どの教えも難解であり、どの修行も困難であつた。それというのも釈尊ご入滅から余りにも時代が経ち過ぎて人々が愚かになったために、人々の素質と環境が聖道門から離れてしまったためである。ところが善導大師は念仏を唱える行は必ず極楽往生できる正定の業であると説き、浄土三部経には阿弥陀仏が念仏往生の誓願を

成就し給うてゐることを明かし、念仏の法門は後世永く弘通させる教えである説いている。念仏を唱える者は阿弥陀仏の本願力を力強い縁故とすることができるのであるから、その者に学識があるかないかを問題にせず、持戒者と破戒者とを区別することなく、すべての者が生滅変化のない宝国に生れ、再びもとに戻ることはない。このように凡夫が極楽往生できる道は浄土の一門であり、念仏を唱える一行だけである」(勸修御伝第十四)

上人は更に言葉を継いでいった。

「ただしこれらの話は凡夫であるわが身を深く反省し、自ら得た信念を述べただけである。決して勝れた才能をもった人々の智解と修行を妨げようとするものでない」(同上)

上人がこのように説き終ると、顕真を初め多くの人々は何れも上人の説法に心服した。やがて顕真は柄香炉をとって立ち上り、高声に念仏を唱えながら丈六の本尊の周りを巡り始めた。満座の人々も声を合せて念仏を唱え

た。三日三晩にわたって念仏の声が山谷にこだまし、林野に満ちたという。上人は後になって、次のように説いている。

「まさしく今の時代は念仏の一行が広く行き渡り、すべての人々その利益を蒙る機会に際会している。阿弥陀仏は無量無辺の光明を放って十方の世界を照らして念仏を唱える者を摂取し、一人も洩らし給うことがない。このことは中空に皎々と輝く月があれば、どここの水面にも月が映ってきらめいているのに似ている。月が地上に降りてきたわけでないし、水が天に昇ったわけでもないのに、月と水とが一体となって、水面に清らかな輝きを宿している。それと同じように念仏を唱える者がいれば、その者は仏と一体となって往生できるのである」(選択集)

このように、念仏往生の教えは永遠の法門である。

(つづく)

み仏とともに

=8=

—大本山に入寺—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

片岡麟瑞上人夫妻に守られながら、田舎育ちの私は、寺の小僧としての教養としつを厳しくつけられた。今日の私があるのは、この片岡上人夫妻によるところ大きいことを、今になって改めて感じている。

この寺には、一人のお婆さんが同居しておられた。母さんの母に当る人であったと思う。信心深い人で、朝晩本堂でカンカンと鉦を叩いて、長い間お念仏するのが日課であった。そしてこのお婆さんは、この上なく私を可愛がってくれた。幾つまで生きられたか定かでないが、私が仏専（今の仏教大学）在学中も元気でおられたので、随分長生きされたことと思う。

すでに私が小学生の頃から、殆んど布団の上で生活されていたので、特に病氣というわけではなかったが、その頃、相当な年であったように思う。腰がひどく曲っていた。

お婆さんは、毎朝牛乳を一本飲むのが日課であったが、私が小学校に行くとき、「行ってきます」と挨拶に行くと、必ずこの牛乳を一口飲ませてくれた。それも、母さんには内緒であった。学校から帰ってきて、「ただいま」というと、また何か菓子などをくれた。ここにも

一人、私を守るみ仏がいたわけである。このお婆さんは、私が大学生になっても、前と同じように可愛がり、時に尋ねて行くと、



—百万遍知恩寺—

御影堂—

「牛乳を飲まんか」

と進めてくれたりした。しかし、この寺には小学校時代だけしかいなかったため、残念なことに、その死にめにも、葬式にも会うことができなかった。申し訳けない気持ちで一杯である。

多分、私が小学校六年生になった頃と思うが、私より二、三歳年下の小僧さんが、新たにこの寺にやって

きた。母さんの親戚すじに当る人であった。旧姓は本田といったが、結局この人が、私に替って寿仙院の養子となり、片岡麟晃と改名することになる。後年この人は、大正大学の浄土学を卒業（昭和二十三年）するのであるが、どうした理由でか、寿仙院を継ぐことなく、商社マンとなり、再び本田姓を名のっていた。そして、すでにこの世にはいない。人間の運命などというものは、分らぬものである。

小学校六年生の冬のことであつたと思う。片岡上人は、二人に寒念仏の修行をさせようと、準備をした。腹の前に小さな鉦を吊り、頭は白木綿でくるみ、写真にかがたような装束となつた。この装束で冬の街を念仏を唱えながら歩かせようというのである。お婆さんは、記念のために写真に入っただけで、寒念仏に歩いたわけではない。

さてこの装束で、師匠と私と弟分の麟晃君と三人は、百万遍を出て東山の裏通りを祇園に行き、祇園の街々を念仏しながら歩いて廻った。小学校六年と三年の小坊主が、かん高い声で「南無阿弥陀仏」と唱えながら、鉦を叩いて歩くのであるから、珍しかったに違いない。あち



——寒念仏のいでたち——

(片岡上人・麟晁・お婆さん・筆者)

らこちらの家からお布施を持った人びとがでてきて、私達の袋に入れてくれた。その度ごとに、私たちは改めて

お十念を称えた。

街の子供達が、珍しげに私達の顔をのぞき込んできた。はずかしいやら、腹が立つやらで、キッとにらみ返したことを覚えている。木枯らしが吹く冬の夜の寒念仏とあってみれば、なかなかの苦行であった。それでも何日間か、この寒念仏に出掛けたように覚えている。片岡上人夫妻のわれわれに対する心やりは、このように厳しかったが、また心温まるものであった。それは私の少年時代の精神修養に、大きな力となった。

そうこうしている内に、私の身の上に大きな問題がふりかかってきた。

寿仙院の二人の小僧のことは、寒念仏以来、とくに百万遍中に有名となった。そしてそのことは、当時の百万遍知恩寺のご法主であった林彦明大僧正の耳にも入った。百万遍の風呂場は、丁度、道を隔てて寿仙院の本堂と向かいあっていた。法主が風呂に入られる頃、われわれ小僧二人は、夕方の勤行を本堂でやっていた。そのお経のかん高い声も、風呂に入っている法主の耳に入ったらしい。

或る日、法主の使いとして、法主の子息である林真彦

師が寿仙院にやってきた。真彦師は、その頃百万遍本山に止宿して、法主と生活を共にしていた。

「二人のうちのどちらかを、法主のお弟子にくれまいか」

これが、使者である真彦師の申し入れであつたようである。すでにその頃は、私は得度式も終り、禪教という法名ももらつていた。勿論まだ、戸籍上の改名まではしていなかつたが、片岡上人の弟子として、寿仙院の後嗣となることになつていた。しかし、片岡上人夫妻は、法主の弟子となることは、大変名譽なことであると考え、私を法主の弟子として進上することを決定してしまつた。

その間、私がどういう態度を取つたか、一向に覚えていない。多分、小学校六年生のこともあるので、その間の事情も分らぬままに、応諾したのではなからうか。そして私の身辺は大変動して、私が東山中学校（今の東山高等学校）に進学（昭和九年）すると相い前後して、林彦明法主の弟子として、法主に常隨給仕するため、本山で起

居する身となつた。

その頃、本山には、二人の仏專に通っている内侍僧がいた。私はこの二人と起居を共にし、朝夕の勤行には、法主の伴僧として、坐具と香合を持つてお伴した。私の生活は激変した。周りは男ばかりの本山生活で、今までのような家庭生活とは全く違うものとなつた。そして、法主のお食事の給仕をしたり、外出のお伴をしたり、揮毫の墨すりをしたりと、多忙の中で、何かものたりない生活の毎日であつた。しかし、親元ともいふべき寿仙院はすぐそこにあつたので、時々でかけては、姉さんやお婆さんと話しをしていた。

田舎の父母達にしてみれば、私が法主の弟子となつたことを、この上ない出世と喜んでゐた。或る日、両親は法主に挨拶にでかけてきた。頭を疊にすりつけて、口もろくにきけず、ただただ平身低頭していた姿を、私はいまだに印象深く覚えてゐる。田舎の百姓夫婦が、法主に面会するなどということは、破格のことと考えられていた当時としては、こうしたことは、当然のことであつたと思われる。

その時、土産に頂いた法主揮毫の扇子と、百万遍の布

呂敷は、永い間、額に入れて田舎の仏壇の上に飾ってあった。いかに両親が、この時の面会を、有り難いことと思っていたかが、よく分る。

百万遍では、四月に御忌^{ごぎ}が行われ、本山はにぎわった。そして、この御忌の大法要には、私と、弟弟子の寿仙院の麟晃君が、伴僧をあい務めた。これも当時の百万遍としては、珍しいことであつたらしい。当時の百万遍の御忌は大変にぎやかで、お祭りのようであつた。私自身も、東山中学の一年生ではあつたが、浮き浮きとした気持ちで、この御忌に走り廻っていたことを覚えてゐる。

林彦明大僧正が、どれ程偉い人であるかは、その頃、私は一向に知らなかつた。ただ百万遍の法主であるから、偉い人に違いないと思つていた程度であつた。そして、その弟子にして頂いたということも、それがどれ程の意味を持つものか、一向に知らなかつた。そして、片岡上人夫妻に言われるままに、住みなれた寿仙院を離れ、大本山の小僧として、新しい人生へと出発したのであつた。

しかし、私の人生は、この法主の弟子となることによ

って大きく変化すると共に、私のこれからの人生を、大きく左右することになったわけである。昔から、「親の七光り」ということが言われるが、私もまたこの師匠を頂くことによって、その光りを大きく受けることになった。

「林彦明大僧正の弟子でございます」

こう挨拶することは、今だに浄土宗にあつては、大きな力である。この力に支えられて、今の私があると言つてよい。それ程に師匠は偉い方であつた。

しかし、百万遍の生活は永く続かなかつた。黒谷の大本山金戒光明寺が、この年の四月（昭和九年）炎上するという事件がきっかけで、法主の身邊に大事件がふりかかつてきたからである。

（つづく）

ナムナム童話 (4)

ナムナムさんの石

ぬ・の・む・ら・て・つ・や

山のいただきに 石ころがひとつ のっか
っていました。これがナムナムさんの石です。
空は どこまでも広く すんでいます。

その青い空のまんなかに 白い雲がひとつ
ぽっかりと うかんでいました。

雲は ふわふわと どこへでもとんで行き
ます。

「いいな 雲さんは。」
石が いました。

「あっち 行ったり こっちへ来たり 空の
上から海でも山でも見えるんだもの。いろん
なものが見られて たのしいだろうな。それ
にくらべて ぼくなんか どこへも行けず
ここに すわったまんまだ。」
それを聞いた風が 石にたずねます。

「それならどこへ行きたいの。」
「もちろん 雲さんのいる空の上へだよ。」
「よし。では わたしがつれて行ってあげ

よう。わたしだったら どこへでも行けるんだから。」

風は 口をふくらますと ブウーッと ちからいっぱい 石をふきとばしました。

「わあーっ とんだ！」

ふわーっと とびあがって 雲のところまで行ったとおもった石でしたが――

「ドッシン！」

「いたた いたいよ おおいたい。」

大きな岩の上におちた石は ゴロゴロと 山の上から ころがりはじめました。

「ぐるぐる ぐるぐる目がまわる。わたしはどこへ行くんだろう。」

空の雲が だんだん小さくなっていきます。

「わたしは 雲のところへ行きたいといったのに これでは ぜんぜんはんたいだ。」

風は しらんふりをして どこかへ行ってしまうました。

ゴロゴロ ゴツツン ゴロリンコ

山のみちを ころがる石は

「ガッツン！」

岩にぶつかって ふたつにわれました。ふたつにわれた かたいっぽうの石は『さよなら』といって また ころがっていきました。のこった もうひとつの石は 通りかかった山のぼりの人が

「これは ちようどいい石だ。すべりやすいところだから 歩きやすいように石段につかおう。」

あとから のぼってくる人は

「これは とても歩きたい。」

と みんなで石をふんでいきます。

「わたしは 雲のところへ行きたかったんだがなあ。」

といいながら 山みちの石段になりました。

コロコロ コツツン コロリンコ

ころがりつづける かたいっぽうの石は

「ゴツツン！」

また岩にぶつかって みつつにわれました。

そのうちの ひとつは『さよなら』といって
ころがりつづけていきました。

のこった ふたつの石は 山の分校へかよ

う男の子が ひろいました。

「ほら かたちのいい石だろう。」

男の子が 女の子にみせると

「あら ほんと。わたしに ひとつくれる？。

ぶんちゃんに ちようにいいかもしれないわ。」

ふたつの石は それからずっと 男の子と

女の子のカバンの中で だいじにされました。

「わたしたちは 雲のところへ行きたかった

んだがなあ。」といいながら。

ガラガラ ガツツン ガラリンコ。

ころがりつづける石は

「コツツン！」

またまた岩にぶつかって こんどは よつ
つにわたのです。

そのなかの ひとつは『さよなら』といっ
て ころがっていきました。

あとの みつつの石は「ドボン ドボン
ドボン！」と谷川におちました。

「おや これは すみやすそうな家だぞ。」

おとうさんの魚が この石の家をみつめて
おかあさんの魚や 子どもの魚をつれてきて
いいました。

「見てごらん。この石には おいしいコケ
がつくんだ。ごちそうの家だ。たのしみにし
ていよう。」

「わたしたちは 雲のところへ行きたかった
んだがなあ。」と 石はいいながら 魚のすみ
かになりました。

カラカラ カツツン カラリンコ

ころがりつづける石は

「カッッッ！」

また岩にぶつかって、いつつにわれました。
そのなかの、ひとつは『さよなら』といっ
て、ころがりつづけていきました。

あとの、よっつの石を、えんそくにきてい
た子どもたちが、みつめました。

「ここに、いいのがあったよー。」

よっつの石を、ビニールの敷きものの、よ
すみにおくと

「これで、風にとばされない。さあ、あんし
んをして、おべんとうを食べよう。」

山の空気はおいしいし、おなかはペコペコ
です。そのおべんとうの、おいしいこと。

みんな、あんまりおいしそうに食べるの
で、それを見ていた石も、ゴクリ、ゴクリ、

と、つばをのみこみました。

「石ころのおかげで、おいしく食べられたね。
この石は、おべんとうを作ってくれた人への

おみやげにしようよ。」

「そうしよう、そうしよう。」

よっつの石には、それぞれに、サインペン
で『おいしかったよ、ありがとう。』と書いて、
四人のリックサックに、しまわれました。

「わたしたちは、雲のところに、行きたかった
んだがなあ」と石はいいながら、えんそくの
きねんになりました。

カチカチ、カッチン、カッチンコ

ずうっと、ころがりつづけた石は、カッチ
ン、カッチン、とぶつかりあって、サラサラ
の砂になりました。パラパラの土にもなりま
した。

砂は、シャベルカーですくわれて、ダンプ

カーにのりました。やっと、山へかえられるの

かなあとおもった砂ですが、セメントとまぜ
られて、こうそうビルの土台になったのです。

もし、ビルがさか立ちすることができたら

雲のところへ行けたかもしれません。

土のまわりには アリや ミミズや モグラなど たくさんの いきものがいます。土からは 草や木がはえて 大きな森になり 花がさいて実になります。

鳥や けものもやってきて あそびます。だから 土になっても ナムナムさんの石は ぜんぜんさびしくはないのです。

たのしい毎日ではあります。

けれど ときどき おもいだすのは わかれています。ナムナムさんの石たちです。

「雲のところへ行きたいなあ」といつていた仲間です。

いまごろ どうしているのかなあ。

ガッツンとわれて 山みちの石段になった石。

ゴツンとわれて 分校でべんきょうをする子どもの ぶんちんになった石。

ゴツンとわれて 川のなかで 魚のすまかになった石。

カッツンとわれて えんそくの おべんとを食べた子どもの きねん品になった石。たかいとかいビルを しっかりと持ちあげている石。

どこの石たちも たかい空を見あげています。

どこまでもつづく ひろい空を見あげているのです。

風が つよくふくとき ナムナムさんの砂や土は 空へまいあがろうとします。

きつと 雲のところへ行きたいのでしょう。みんな いっしょに 会いたいです。

もしかしたら 小さい小さいナムナムさんの砂や土は もう 雲のところへ行っているかもしれません。

(おわり)

青年は、もつと世界に目をむけよう

笹原 堅
（山形市在住）

私は中国帰国者の一人である。今年で五年目を迎える。この間、日本語の習得、職探しと帰国者の多くが経験する過程を私もくぐり抜けてきた。今までは言わば夢中で、過ぎてみればあつという間だったようにも感じるが、国の体制や習慣の違いなど、かなり辛い思いもした。わずか五年間の体験で、日本や青年問題を論じようというのは僭越だが、その一端を述べてみたい。

まず第一に言えることは、日本は平和な国だということであろう。国情が違ふと言えどそれまでだが、国民の多くはそれに慣れ切っていて、世界中どこでも日本と同じだと思っている人が少なくないように思える。四方を海に囲まれた国土は、海が国土を守る防壁であり、外国の侵略を防いでいると言つてよい。一方、この防壁が日本

を世界から隔離しているとも言える。多くの人々は目の前のことしか見えないし、対外的には極めて小心的な感じがする。今日の日本は世界各国への協力活動の中で大きな役割を果たしているが、これからは単なる資金だけの援助ではなく、青年たちがもつと積極的に目を海外に向けて、「島国」という枠からどんどん飛び出して、国際の大舞台の上で世界の平和と人類の幸福のために活躍すべきである。

第二には、若い人々が伸び伸びと生活していることである。どこの国でも、青年の前途には洋々たる未来があると云えるが、日本ほど恵まれている国も少ないのではないかと考える。しかし、じっくり観察してみると、自由なるがゆえに、また経済的に豊かなるがゆえ

に、時に不遜とも言える態度が目につく。

日本は古い文化を有する国であり、長い間礼儀正しいことが日本人の美徳だと称えられてきたが、高度成長期以後、青少年の言葉づかいが少しずつ荒くなってきた。

これはいろんな家庭、社会的な原因があるが、青少年自身の原因も大いにあると思う。青年は国の顔であり、常に心身とも健康でなければならない。これからの国際交流、人々との付き合いに青年は正しい姿勢を取ると共に言葉、礼儀などの見直しが必要なのではないかと思う。

また、外国人のことをよく「外人さん」と呼ぶことが多い。日本人からみればこれは当り前の呼び方かも知れないが、外国の方からみれば、何となく日本人が自分「仲間以外の人」と扱っているように感じて、知らないうちに相手を傷つけてしまう可能性も十分考えられる。今後、世界各国の方と仲良く付合っていくには、もっと相手方の人格、気持ちを尊重すべく、常に相手のことを理解し、謙遜な態度を取らなければならないと考える。

第三は、今日の日本の教育水準が高く、特に東京などの大都會では大学、各種専門学校が集中していて、また、沢山の外国の方が住んでいるために、国際感覚に富

んだ交流が盛んに行われて、すっかり国際都市になっているが、山形県のような農村地域では、まだ相当遅れているのが実情である。青年たちの間にも連帯感の希薄化、国際問題に対する無関心な態度、或いは外国に関する知識が乏しいなどの問題があると思う。

私は山形市役所で二年間中国農業研修生の通訳をしたことがある。仕事を通して言葉の不自由ほど辛いことはないと感じた。同じ人間なのに、国情の違い、風習の相異なる原因で、誤解や意思が通じない時も少なくなかった。もし双方お互いにもっと相手国の言葉や風習を勉強していたら、誤解などを起こさずに済んだかも知れないと思う。

同様に、世界各国の間も相手国のことをよく理解し、話し合いで問題を解決して行けば、トラブル或いは戦争などをなくすことが可能だとも言える。それには、もっと外国の言葉や情況などをよく勉強する必要がある。

各関係者の協力も非常に大事だと思うが、しかしこれは青年自身の問題であり、二十一世紀に向けて、青年たちは自分自身の国際感覚を養うことに努力しなければならないと思う。

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』十一月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林先生の版画絵のほか、大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八二―八七

立ち止まるな善導

〈17〉

寺内大告

挿絵・松 濤 達 文

英才の秘密

四

善導は英才弁機と交友を絶つ前に一度だけ会っている。忠告を詩句に托してみたのである。

早朝、実際寺の庭を歩いていて湧た五言絶

句をたずさえて城外の草庵を訪れた。弁機は謹厳な姿勢で書見していた。亀茲語を羊皮紙に綴った經典である。彼は善導がさし出した詩句を手にとると、声をあげて朗唱しはじめた。

法藏因弥遠
極楽果還深



華開希有色
波揚実相音
何当蒙授手
一遂往生心
濁世難還入
淨土願逾深
金繩直界道
珠網縵垂林
見良皆真色
聞音悉法音
莫謂西方遠
唯須十念心

後に六時礼讃となり、その「晨朝」の冒頭を飾った頌句である。

万人を救おうと誓った法蔵比丘の誓願、それが強烈であればあるだけ、極楽へ往生できた喜びも深いものとなる。その花々は地上では望み得ない美しい色彩で開花しており、波立つ池の水は真理を伝える絶妙な響きを聞

かせてくれる。この現世が濁っていれば、いっそう達しがたい浄土である。それだけにこの地への憧憬は深いはずだ。極楽の道は黄金でふち取られ、珠玉の薄すもので林はおおわれていた。それらの色調はどれ一つとして真理の輝きを持っていないものはなく、響いてくる音色はすべて仏法の妙なる調べを奏でてくれる。この西方の浄土を、遠い土地だと諦めてはいけない。法蔵比丘——阿弥陀仏の御名を十たび唱えれば、そのお姿を十たび想い描きさえすれば、必ず到達するであらう。慈悲の御手がみちびいて下さるであらう。

そんな意味である。

善導が持参した詩句は、現行の六時礼讃より飛んで「哀愍覆護我、令法種増長、此世及後生、願仏常摂受」で締めくくられていた。我れ哀れんでお護り下さい。仏法の種をいよいよ増して頂き、現世とあの世の区別なく、阿弥陀仏よ、いつもお救い下さいませ、と懇願するのであった。

くり返し口ずさんでいる弁機の語調に、やがて高低の揺れが兆しはじめた。それは一つのメロディとなって漂ってゆく。

「この詩句は、眼で味わうものではない。声に出して歌いあげねばならない。さよう、先日、西京の処刑場でおぬしはやはり同じような詩句を歌っていたな。今あれを持っているか」

「ここにある」

善導は懷中から日中礼讃の断片を差し出した。今日は弁機に、これまで創作した礼讃文のすべてを口ずさませようと持参したのだった。

処刑場での「終時苦相、如雲集」に前句が付けられていた。

下輩下行 下根人
十惡五逆 等貪瞋
四重偷僧 謗正法
未曾慚愧 悔前愆

心卑しく、行い悪く、根性も下劣であれば、十惡五逆や偷僧、謗法の罪に馴じんでしまいい、悔いるということを知らない。

そんな惡逆の人間が命終に臨んで……、「終時苦相、如雲集。地獄猛火、罪人前。忽遇往生、善知識。急勸專称、彼仏名」の句へ接続するのである。

朗唱する弁機の抑揚は、いちだんと高音を探ぐりあてようとする。善導がかたわらから助音すると、山頂をきわめる直前で手をさしのべられた登山者のように弁機は喜色を満面に浮べて歌いつなぐ。

期せずして兩人のメロディはびったり合致した。一つの声になった。

「歌曲があらかじめ出来ていたみたいだな」歌いおわって弁機は不思議がった。

「出来ていたのではない。お互いの、仏を求める心が一つだったということです」

「なぜだろう」

「仏を求める詩だったからですよ」

「仏を求める詩か」

「わたしたちは阿弥陀仏によって、この十悪五逆の身を救って頂きたいと願っている」

「うむ……」

「弁機よ。貴僧は、眼と頭脳で經典を理解する点では当代随一だ、と私は思っている。だが仏法を理解はするが、最もだいじな仏と人間との関係——救い、救われるという実践については無知である。救いを求めるべきときに、貴僧は自分を思惟の底へ取りこんでしまふ。硬い歯で仏をも噛み砕こうとする。もっと自然に歌いあげなさい。理解につとめようとするその硬い歯を抜き取ってしまいなさい」

「硬い歯を抜いてしまうのか」

「弁機よ、貴僧は今、見事に心で歌いあげた。救いを求める気持が貴僧には潜在している。いや、助けて欲しいとしきりに願ってさえいる」

善導はすばり弁機の胸底へ鋭いメスをさし入れていった。小轎車から降り立って弁機の草庵へいそいそと歩を運んだ貴婦人の姿がそれをさせたのか。

歌もやめ、言葉も中絶させて、弁機の唇は長い時間、凍結した。善導も黙しとおした。やがて——

「わしは何一つ、天に恥じる行為はしておらぬ。たしかにある女人がこの草庵へ通ってくる。口さがない者は、わしが密通不義にふけていると蔭げ口を叩く。彼女とは幼い日からの知り合いで、それも仏書を共に学んだ仲間なのだ。すでに人妻となり、この草庵へ来るときは、その夫が送って来ることさえある」

弁機は高陽公主との関係をしきりに釈明しはじめた。善導はものやわらくさえぎった。

「それ以上は何もおっしゃるな。人間同士の問題を論じている。それ自体が地獄なのです。仏の慈悲から遠ざかるばかりです。こ

☆☆

求
仏



れを置いてまいります。時にしたが、折にふれて歌いあげて下さい。今の貴僧にはそれだけが必要なことだと思ひます」

懷中にしてきたこれまでに書きためた六時礼讃の断片を、すべて弁機に手渡すのだった。もちろん手渡しても不自由はしなかった。善導はその草稿を一字一句に至るまで、そらんじていたからである。

弁機とは二度と会ひまい。会つてはならない。それは生まるまい人間界の輩の間へさまよいこむことを意味している。

五

唐初におけるこの善導時代、六時礼讃（往生礼讃偈）はどんな曲の調べ、拍子で歌われたのであろうか。音符が伝承しているわけではないので、推測する手がかりもない。

わずかに幸田露伴の「圈外の歌」で和讃の考証をし、そこに一端がとらえられるであろ

う。露伴は和讃詠歌の起源を次のように分析する。

——和讃は漢讃にもとずき、漢讃は梵讃にもとずいている。仏教が支那（中國）に渡つて梵讃が伝わった。それを真似て支那の人達は讃歌を作つたが、支那個有の声調格律に従つて作ることをつとめないで、その國の文学歴史から云えば破格のもの、即ち平仄にも余り心せず、韻脚にも心せず、ただ五言七言、もしくは四言等の詩の外形の祖分だけを假借して、詩のような、詩でないようなものを作つた。翻訳に際して自國の詩のようにしたかったが、その自由が利かないところから其のよきなものを作り出したのであろう。詩と言ふぬから「偈」と云い、あるいは「讃」と云つた。偈は迦陀即ち頌、もしくは讃、詩の意の梵語をそのままに写した言葉だ。後に至つて支那の僧侶が自ら作つたその体（てい）のものをも偈と言ひ、或いは讃と云つた。それが我

が邦に移ってきて邦語でその讀のようなものを作り、これを和讀と云った。

この文章を読んでいると、あたかも善導の六時礼讃を念頭に置いて書かれたかとさえ思われる。梵讀——漢讀——和讀の系譜のなかで、その音色が探ぐりあてられるであろう。漢詩の平仄や韻脚を無視して、その七言（一例が日中礼讃、弥陀身色如金山）五言（晨朝礼讃、法藏因弥遠）の詩句が梵唄のメロディを基調として大衆の間で広く歌われたというのである。

善導の六時礼讃をもふくめてこうした「漢讀」が大衆歌として浸透した実体らしきものを長安の「斗歌」にみることが出来る。白楽天の弟白行簡の作といわれる小説「李娃伝」に長安の東西両市のノド自慢が歌を競い合う場面がある。数万の群衆が集り、この歌くらべに熱狂した。チャンピオンに選ばれたのは莊嚴寺の善本という名の若き僧だった。彼は

女装してその美声で群衆を酔わせた。

さらにこれを紹介した石田幹之助は、その「長安の春」で、

——もしそれ洛陽出土の女俑（よう）のあるものに至っては、輕羅の細腰が婉転たるソブラノに両街の子女を魅する容態を写したかと思わすものに乏しくない。何の憑拠もないところではあるが、眉を低うし、体を斜めにして瞳を凝らし「歌わんと欲して未だ歌わず。遠山を愁う」（宋、陸游）の趣きは、しばらくこれを歌合戦のブリマ・ドンナとして見るも史家に許される自由であろう。

洛陽で出土した盛唐期の女俑（女人の^{ヌナコ}人形）にソブラノで大衆に歌いかける美女の幻を思えばいたのだ。「李娃伝」は貞元十年（七九四）前後に書かれたもので、遊女に捨てられた貴族の男が悲惨な境涯へ追いこまれる。しかし遊女はやがて仏心に目ざめ、男を救い

出す。再起した彼は出世街道を突進することになる。遊女青娃も「国夫人」の称号を唐政府から受けたのである。

例の斗歌は、男が落魄して長安の葬儀社で働いていたころの環境描写である。ところで斗歌で歌われた美声の内容だが、薤露（かいり）蒿里（こうり）の歌として、葬送歌だけに限定されるであらうか。哀調切々たる悲しみの歌だけでは広く大衆の心をとらえないはずである。斗歌の記事に歌の伴奏者として、しばしば西域の楽人たちが登場してくる事実を見逃してはならない。サマルカンドやソグトの胡人たちである。

梵讃から漢讃へ。

この梵讃とはインドの詠法による梵唄であらう。声楽化した声明（しょうみょう）と考えてよく、善導の六時礼讃も旋律をこの枠内へ組み入れるべきである。

インドの詠法とは言いながら大乘仏教の成立、その東漸経路において、西域の音曲を吸

収したであらうと推定するのは、きわめて自然である。宗教儀礼としての声明はともかく、声楽化した梵唄にはふんだんに西域調が盛りこまれたはずである。それが中国へ流入し、この国古来の音律も加味されて漢讃が出来上がったにちがいない。

じつはこの漢讃こそ世界における宗教音楽の原点となっているのである。

キリスト教聖歌の歴史をたどってみるがい。発端はギリシャやシリアの音楽に基調を置いた単旋聖歌であった。詩句をそのままメロディに乗せて歌い流すのを「単旋」と呼ぶ。これが西方教会ではミラノのアンブロジウス聖歌とか、ガリア地方のガリア聖歌、スベインのモサベラ聖歌となって典礼音楽は発達した。

七世紀へはいつて聖歌の統一が求められるようになった。ローマ・カトリックが全欧州を支配しはじめたからである。グレゴリウス一世によってこの聖歌統一は完成された。世

にいうグレゴリオ聖歌である。

この聖歌は、伴奏もともなわず、また拍節の拍子も持たず、ラテン語の自然なリズムをそのまま生かした自由な朗唱風の単旋律である。しかもその単旋律は基調に東洋のメロディがふんだんに採り入れられていた。長調や短調の調性音楽とは全く異質だった。その東洋風のメロディは「きわめて異教的色彩が濃厚であった」とは、キリスト教音楽研究者の一致した見解である。異教的色彩が仏教の梵唄を指摘していることは言うまでもない。

グレゴリオ聖歌が現代へまでつながる端緒を開いたのは、九、十世紀になって「単旋」から「多声」へ進化したためである。従来の一本だけの曲に平行して多声の音程を加えたのである。二部や三部の合唱形態である。これにオルガンなどの伴奏楽器も加わってきた。

善導の六時礼讃へ戻る。

——ソノ中ニ安楽房トテ、泰経入道ガモトニアリケル侍。入道シテ専修ノ行人トテ、又住蓮トツガイテ、六時礼讃ハ善導和上ノ行ナリトテ、コレヲタテ候ドモニ帰依セララル者出デキニケリ。

慈円僧正「愚管抄」の一節である。善導の六時礼讃が日本でさかんに歌われた記事である。安楽、住蓮は法然門中の専修念仏者で、この漢讀を哀歎悲喜をこめた旋律で歌いあげ、おびただし数の信者を集めた。それが過熱して宮廷の女房たちとの密通事件をひきおこし、安楽や住蓮は処刑され、法然流罪にまで拡大したのである。十三世紀初頭のことである。

では安楽、住蓮らが調律した六時礼讃は、どんな声楽内容であったのか。「声」は消えてゆく。今日これを確認すべくもないが、哀調切々と人心を魅惑し尽した点は疑いを入れない。しかもそれが天台声明の如く難

局で韻律が厳肅だったとも思えない。そんな内容では無知な大衆の共感を呼び得ないからである。平易で習得しやすく、今日流で言うミーちゃんハーちゃんでも口ずさめるものだったにちがいない。いわんや風俗事件にまで暴走したほどで、愛唱した者が殆んど女性であつたから、当時巷間で歌われた「今様」(流行歌)に近似したメロディではなかつたであらうか。

ちなみに「愚管抄」が指摘する安楽房の前身「泰経入道ガモトニアリケル侍」の泰経は、高階泰経であり、後白河法皇の侍従武官長で、安楽房は前身が北面ノ武士だった事実を明らかにしている。

後白河法皇は「梁塵秘抄」でわかるように「今様」の大家であつた。安楽房は「今様」歌謡のなかで育ってきた男とも言えるであらう。

「今様」ついでだが、この歌謡は仮名の詩句が軸となっている。いくたの仏教唱導歌も

混じりこんだ。この仮名文の仏教唱導歌が一つのジャンルとして確立したのが詠歌和讃である。親鸞はそのすぐれた指導者で、自作の浄土和讃を各地で普及させた。彼の流亡の旅、信州善光寺から関東各地の教化にこの和讃指導が主務だったという説も最近提示されている。

漢讃を、六時礼讃の詩句を漢語そのままで大衆歌の旋律に合成させたのが安楽、住蓮らの和讃だったのではなからうか。善導の詩句を崩さずに温存し伝承したところに法然教団の「偏依善導」という教義上の拠り所がうかがえる。詠歌とまぎらわしくなるゆえ和讃の呼称を改めれば、念仏聖歌としてこの六時礼讃を呼んでもいいはずである。

声は消える、と書いた。たしかに微妙な細部で喰い違いは生じたであらう。十七世紀あたりから「博士」(音符)を付したり、上中下音に歌い分ける六時礼讃の旋律、しかし骨格において安楽、住蓮期のそれを著るしく換骨

脱胎したとは思えない。人間の「声の記憶」は正確である。それが大衆へ喰い入った内容を持つものであれば、なおさらである。

著しい変容は、むしろ、音符記号などによる音楽メカニズムが確立したあとで実施される。だから大正十二、三年ごろ整備されたという現在の浄土宗の六時礼讃は、メロディの軸芯において安楽、住蓮期と余り異なっていないであろう。大衆の耳は、神仙に匹敵する生き証人だからである。

ただし安楽や住蓮たちの六時礼讃が善導のそれを旋律のうえでどこまで継承できたかは疑問である。五百年の空白、中国における善導浄土教の退却、さらに日本と中国との音楽風土の異質、とりわけ西域と隔絶した日本の条件などを考え合わせると、かなり異なった曲付けだったと思われる。音楽手法上ではリズムカルなものが欠除していたのではあるまいか。

六

さて善導が英才弁機との交友を絶って二年余の歳月が過ぎ去った。貞観十九年(六四五)の正月、玄奘三蔵が十七年間に及んだ西域、インドの旅を終えて長安の都へ帰ってきた。

民衆の熱狂ぶりは異常なほどで、二十四日に京郊の西へ到着したのだが、群衆のため城内へはいることが出来なかった。折から太宗皇帝は高麗遠征の軍を発したため長安に不在だった。留守には老宰相房玄齡が任じていた。弁機の愛人高陽公主はこの老宰相次男の嫁である。

房玄齡は翌二十五日、玄奘を城内へ迎え入れ、城内東南にある教化坊の都亭駅をいちおうの宿舎とさせた。さらに翌日は持ち帰った經典仏像のすべてを朱雀街の南で展覧し、二十八日さらにこれを弘福寺へ移して収納させた。

玄奘が持ち帰ったものは大乘經典二二四部、大乘論一九二部、小乗の經律論一九三部、因明論三六部、聲明論一三部だったと「慈恩伝」は書いている。仏像は七軀、仏舍利一五〇粒とする。西域からインド各地、一三八カ国を巡歴した土産物である。

遠征軍指揮のため副都洛陽まで出陣していた太宗皇帝は、二月急ぎ長安へ戻ってきて皇宮の儀鸞殿で玄奘に面謁する。

「直接立ち会ったわけではありませぬが、長官のお話によると……」

王徐明は面謁の内容を善導に伝えた。

彼が言う長官が尚書左僕射（さばくや）の房玄齡自身であったか、その配下の侍従職であったかは明言を避けた。王徐明も隙のない官僚体質が身についたと言うべきであろう。

それによると太宗皇帝は長い旅をねぎらい、その功績を讃えたあと二つの事を玄奘に要求したらしい。一つは一日も早くその旅行記を完成させること、二つは僧侶をやめて還

俗し唐政庁へ働かないか、ということだったらしい。入庁すれば重要なポストを与えるであらう。

「それでは玄奘和尚、十七年間に身命を賭した労苦も仏法のためではなく、一国の経略に献げたという結果だけになる。一国の経略と仏法と、どちらが重いものであらうか」

おだやかな善導が珍しく辞を激して言い切った。王徐明は静かに微笑んでいる。吏僚の彼としては、俄かには同調できぬはずである。

「玄奘和尚は、持ち帰った経論の訳業を専一にしたい、と拝辞したそうです」

「旅行の記述については？」

「これにも生来、文を作すこと貧しくして到底その任にたえず、誰か達筆麗文の士を御推挙願いたい。見聞し得た事実は洩れなくその士にお伝えするでしょう、と答えられたようです」

玄奘の態度はあくまで慎重だったらしい。

太宗皇帝は諦めず、このあと面謁をかさねては玄奘の還俗、入閣をうながしている。

玄奘はその都度、固辞しては訳経場の設定を求めた。「帝は法師が公輔の寄に堪うるを察して……」訳経場を取りあえず弘福寺と定め、それに要する経費の支出と訳経僧の人選に取りかかった。

ところで玄奘三蔵。その出生物語には奇怪な伝説が流布している。顯著なのが孫悟空で有名な「西遊記」のそれである。

その昔、陣光薤（こうすい）という若者が科挙の試験に首席で合格した。美しい娘温嬌と知り合い、熱烈な恋愛のすえ兩人は目出たく結婚した。やがて地方の吏官に就職、妻を伴って任地へおもむいた。ところが旅中、強盗集団に襲われた。夫は殺され、妻は囚われの身となった。

折しも彼女は懐妊の身であった。盗賊の山寨でその子を生み落したが、こんな環境で育つては悪党になるだけだ。観世音菩薩に祈り

つつ嬰兒を川へ流してしまった。その嬰兒が金山寺の法明和尚に拾われ、育てられるという福運に恵まれた。長じて、そのまま僧になったのが玄奘法師だというのである。

荒唐無稽な造り話にはちがいないが、玄奘三蔵の破乱と冒険に満ちた半生を暗示した出生伝奇で作者の創作意欲だけは評価できであろう。つまり玄奘三蔵は、あれほどの偉業を達成しながら、どこか暗い一面が付きまといっているのである。西域への出発も大手を振った旅立ちではなかった。国外逃亡を思わせるものがある。

これは訳経の仕事が順調に進んだころの逸話である。

玄奘は彼が旅に登る以前に漢訳された經典を講義することを禁じた。太宗やその帝位を継いだ高宗の強権を背景とした形跡がある。これに対して僧法沖が激しく罵った一節を道宣は「統高僧伝」で紹介している。

「貴僧はその旧訳經典によって出家した身で

はありませんか。旧訳が誤まっていると言うのであれば、貴僧もいま一度俗人に戻り、新訳によって出家し直したらどうですか」

玄奘はこの反駁に一言もなく、以後はそうした発言を慎しんだという。

暗い一面——それがあつたからこそ太宗の要請にも慎重すぎる姿勢を堅持しとおしたのであろう。また、ひとたび足場が固定したと確信すれば、威丈高になって押してくるものもこうした人間の特色である。

紛飾されたミステリアスな「西遊記」の出生物語は論外として、正史は玄奘の誕生地を河南省の緱糸県としている。父は陳惠、県吏であつたという。母は隋代の洛州長史宋欽の娘だつた。

俗名は陳祿、次兄に陰素という人がいた。早くから出家し、洛陽の浄土寺に住した。長捷法師と呼ばれた。

玄奘の陳祿は七歳の折、この次兄のもとへ身を寄せて出家した。だが得度出家の年月日

は不明である。師僧も肉親の次兄以外にいない。いやその次兄の長捷法師ですらが、西域の旅から戻った玄奘の著作類に全く登場してこない。

兄であり師であつた人の名が、かりに他界したとは言え一度も顔を出さないとは、どういうことなのであろうか。「玄奘はもぐりの私僧だつたのではないか」そんな蔭げ口が叩かれたものだ。「だから西域の旅へ出立した折も国外逃亡もどき」ではなかったか。国内で身動きが取れなくなり、国外へ逃げだしたのではないだろうか。

もちろんそこには玄奘の破天荒な偉業へのジェラシーが伏在していた事実も見逃してはならない。

とにかく玄奘三蔵。多くの謎を持った傑僧であつた。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十一巻 十一月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十年十月二十五日 印刷

昭和六十年十一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷 鈔

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒（三） 振替東京八一八二一八七番

現代仏教情報大事典

現代仏教情報研究会編

仏教界の「現在」が見えてくる情報源!!



【定価二二、〇〇〇円】特別定価一九、〇〇〇円

(昭和61年3月末迄)

【内容】①寺院に関する情報↓各宗派の本山、有名寺院、海外の開教寺院・名所仏蹟など②組織に……↓各宗務庁、都道府県仏教会、学会、宗立学校、仏教青年会、宗教法人事務主管部局、世界仏教徒連盟など③行事・儀式に……↓主な本山・有名寺院の行事、冠婚葬祭、④仏教常識に……↓知っておきたい仏教知識・仏教用語など⑤寺院経営に……↓税務対策、多角化、法律問題など⑥布教に……↓放送、テレホン相談など⑦仏教関係業界に……↓マスコミ、葬儀、墓地・霊園、仏具、石材、門前町、精進料理、⑧人物に……↓現代人物名鑑(僧侶・学者・文化人等約300人)、物故者

絶賛発売中!!

大日本仏教全書

仏書刊行会編 全二六一巻

(※浄土部Ⅱ巻53Ⅲ巻63)

ご希望の巻を分売致します。
分売一冊単価二一、〇〇〇円

織田得能著 仏教大辞典

定評ある内容の正確さと、
語彙の豊富さ。豪華机上版。
B5判・定価一六、〇〇〇円

仏像仏典解説事典

三井晶史編(昭和新纂国訳
大蔵経解説部一・二巻合本)
代表的な仏像一八点・仏
典五三六点を収録。索引付。
四六判・定価二一、〇〇〇円

梵字大鑑

種智院大学密教学会編
わが国唯一の梵字一大集成
B5判・定価二五、〇〇〇円

- 内容見本無料贈呈・電話またはハガキ(JD係)でお申し込み下さい
- ご注文・お問合わせも直接当会へ
- 全国無料配達・代金後払い

☎03(724)8031

名著普及会
基本的名著の
再評価と普及
〒152 東京都目黒区平町1-16-6